

研究課題 (テーマ)	「寺子屋」制度の定着に向けた知識伝承方法の体系化		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	環境・社会基盤工学科	教授	黒田啓介
	環境・社会基盤工学科	教授	中村秀規
	環境・社会基盤工学科	教授	星川圭介
研究結果の概要			
<p>本学科が実施する「寺子屋」は、学生の①環境工学・土木工学に関する基礎学力の修得体制の強化、②講義・実験・演習科目の深い理解、③レポート作成能力の向上、の3点を目的に、2023年度に開発・試行を開始し、徐々に拡充し、2025年度が最終年度である。寺子屋の教育効果は、学生に向けて実施したアンケート調査などにより実証済みであり、今後は参加教員を拡大しながら継続できる体制を構築することが求められる。また、これまでの寺子屋で得られた情報を体系化し、授業へとフィードバックすることで授業内容や教授方法の改善が図られることが期待される。</p> <p>これらのことから、2025年度の本プログラムでは以下を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 実施回数や体制は担当教員の裁量とし、複数科目での共同実施や研究室での実施、3年生の科目にも導入など、学生が参加しやすく教員も対応しやすい柔軟性を確保した。昨年度に引き続きフィールド体験とレポート作成も対象とした。</li> <li>2. 次年度以降を見据え、より少ない数のTAにより実施することを検討したとともに、参加教員数・授業数を増やした。</li> <li>3. 一昨年度、昨年度同様、効果測定のためのアンケート調査を、参加学生だけでなく指導した学生と担当教員に対しても実施した。</li> </ol> <p>2025年度は、2024年度(13科目・教員10名)からさらに拡大し、前期・後期の両学期で14の講義・実習(担当教員12名(環境工学講座6名、社会基盤工学講座6名))で寺子屋が実施された。学年別では1年生が5科目、2年生が6科目、3年生が3科目であり、3年生を対象とした科目が増加した。2025年度は実験実習科目のレポート作成においても寺子屋を実施しており、学生が高頻度で躓くポイントをあらかじめ寺子屋でTAがチェックすることでレポートの質の有意な向上が見られた。アンケートでは、利用学生は理解が深まった・試験勉強に役立った、指導学生は効果的な学び直しの機会となった、担当教員は利用学生の成績が向上した、など総じてポジティブな感想が多かった。一方、試験前は混雑して十分に対応できなかった、他の授業によって寺子屋に参加できなかった、学習意欲の低い学生をすくい上げる効果は限定的、などの課題が見られた。</p>			
今後の展開			
<p>寺子屋は、一定の学習意欲があり、学習上の支援ニーズがある学生に対して、教員以外による支援手段として有効であるとともに、指導学生の担当内容および指導それぞれの能力強化に役立つと考えられた。今後も運営の効率化や相談内容の蓄積・体系化・フィードバックを推進し、より学生・教員のニーズに合った寺子屋制度にするとともに、寺子屋制度の定着化を図っていく。</p>			